

いきいきと暮らせる社会を支える 交通システムを目指して 実践的な都市交通計画の視点から

中村文彦 Fumihiko NAKAMURA



横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院研究院長

はじめに

国際交通安全学会がこれから目指すべきものは何なのか。この問いかけに回答するためには、国際交通安全学会はこれまで何をしてきたのか、会員である自分は、この学会のメンバーとして何をしてきたのか、ここを総括しないわけにはいかない。

IATSSでお手伝いさせていただいたこと

IATSSとのおつきあいは、記憶している限り、1988年頃からだと思う。いくつか記憶が定かな印象の事項を並べてみる。

最初は、確かPeter Jones先生の来日ミニセミナーを拝聴させていただいたときで、国際的な雰囲気には圧倒された。昨年自分も実施したが、海外の素晴らしい研究者・実務者の招聘は重要な活動である。

次に、89年1月、褒賞委員会の現地見学についていき、当時は少数派の夜行高速バスで弘前までいった。それから十数年後、会員になってから褒賞委員会は6年間経験したが、成長可能性のある先進事例をきちんと世の中に伝えていくこともとても重要なことである。

そして、90年、警察庁、当時の建設省、運輸省の共同委託の研究を2年間お手伝いさせていただいた。太田勝敏先生、赤羽弘和先生、久保田尚先生に大変お世話になった2年間である。縦割りになっている都市交通問題について、実務分野で横断的に、そして学問分野でも学際的に取り組んでいく現場に立たせていただき、海外調査で、生まれて初めての世界一周も体験させていただき、その後の海外事例調査のための基礎訓練をさせていただいたわけで、とても感謝している。海外の先進事例の現地調査とヒアリングは、現在でもIATSSの中心的な活動であ

るが、あのときの調査では、分野横断的であった点は今でも印象に残っている。国内事例についても、警察庁のご協力で、通常はなかなか手に入らない資料も閲覧させていただいた。行政との連携研究の重要性も身にしみて味わった。

その後も、いくつかの調査研究に呼んでいた他、提案テーマを実施させていただいた中で、多くの海外調査や提言をさせていただいた。出版物でも数多くお世話になった。IATSSの発信力、社会訴求力は極めて意義深い。

これからのIATSS

自分が所属している他の学会と比べた場合に、IATSSは、財源の潤沢さが際立つのはさておき、学際性や実践性、社会訴求に力点が置かれるべきである。サロンは徹底的にサロンであるべきで、そこでの議論を海外調査や実証実験につなげていく活動が継続されるべきであろう。大規模なセミナーやシンポジウム、提言等だけでなく、具体的に社会を変えていく実績、それを担う人材育成が求められているといえる。

その目指すところは、いうまでもなく、いきいきとした社会であり、その社会を支えている交通について、横断的かつ学際的かつ国際性豊かな視点でサポートするのがIATSSであろう。前節での記述を振り返り、まだまだ未熟ではあるにせよ、研究者としての今の自分のかかなりの部分がIATSSに育てていただいたのは間違いはない。現在の若い研究者が、いろいろな形でIATSSとかかわり育っていくことがIATSSにとって重要なことはいうまでもない。

1962年新潟市生まれ。85年東京大学工学部都市工学科卒業。同大学院を経て、89年同助手、95年横浜国立大学助教授、2004年同教授、13年より現職。都市交通計画、公共交通計画、発展途上国の都市交通政策が専門。(会員/2001年会員就任)